市の花「大賀蓮」の系統保存に係る第２回技術講習会

平成２５年５月２４日

講師　　南　定雄

大賀蓮の立葉の出る時期の管理の要点

5月の上旬になると天候も安定して、気温が上昇し20度を超す日も増えてきます。日照時間もだんだんと多くなると浮葉が多く出てきます。
中旬ごろには、一株当たり立葉も３～４枚となります。
気温や日照時間、栽培場所、栽培容器などの条件等にもよるが早咲き系の大賀蓮は、早くも蕾が出てくる時期になります。
今年は5月中旬には気温が25度以上の日が続き、蓮華亭の蓮池では蕾の数も多く見られるようになってきました。
今の時期の花蓮の管理ではハスの生育状況を見ながら、病中害の防除、除草、追肥の作業が主な仕事になります。

病虫害の防除及び除草

病虫害対策

花ハス栽培の病害虫対策として、まずアブラムシの防除が挙げられます。
アブラムシ駆除：大賀蓮はアブラムシの発生が他の蓮に比べ多い、浮葉、立葉の展開時期に合わせ発生します。　アブラムシの発生を助けているのは浮き草の発生もその原因であるともいわれている。浮き草防除がアブラムシの駆除にもつながる。4月中下旬、浮き草の発生を見たら除去を行う。大量に発生したらダイシストン粒剤をまいて駆除します。
腐敗病防除：　腐敗病は花蓮栽培の中で最も注意を要します。長期間の連作、冬季の土壌乾燥が発病を多発させる原因と言われています。冬季の花蓮池や、鉢栽培の水管理が腐敗病予防の対策として重要です。

[病害予防]

１．ハス腐敗病：発病した栽培鉢は窒素過多を避ける。追肥で肥料過多になると葉が黒ずんで見える、これは葉の生長が止まったことを意味する。栽培鉢の水を入れ替え、次の追肥から、施肥量を少なくする。

２．ハス褐紋(かつもん)病：葉の表面に赤褐色、暗褐色の輪郭のはっきりした円形の小斑点を現れる。裏面から見ると色が淡い。

３、ハス褐斑(かつはん)病：葉の裏面に針で突いたような暗褐色の小斑点を生じ、しだいに拡大して直径5～２０ｍｍの屋や角張った褐色、暗褐色の病班になる。

４、ハス炭そ病：発病の診断は、葉と葉柄に発生。はじめ巻葉の先端部または葉縁に紫褐色の病斑が出る。病葉は病斑部が成長しないため形が崩れる。

５、防除農薬

ハス褐紋病：ジマンレックス水和剤

ハス褐斑病：トップジン粉剤、ジマリックス水和剤、ジマンダイセン水和剤

ハス炭そ病：イマダイセン

[害虫駆除]

アブラムシ

クワイクビレアブラムシ(別名：ハスクビレアブラムシ)

萌芽後の浮葉、立葉（巻葉)、葉柄に多数発生すると初期生育が悪くなる。地下茎の発育も阻害される。５月上旬から６月上旬までの駆除を徹底して行う。

ヒメタニシ、ユスリカの幼虫

浮葉の出始めの頃、4 月上旬から発生します。ヒメタニシは浮き葉の葉裏や葉柄の水につかっている部分を食害しやや大きな穴をあける。浮葉の裏や、鉢縁にカンテン状のものがつくのがヒメタニシの卵である。ユスリカの幼虫は浮き葉の葉裏や鉢の縁にいる。葉に小さな穴があく。住処は土の中で、土が少し盛り上がっている中にユスリカの幼虫がいる。駆除が遅れると初期の生育に影響がある。市販の農薬で駆除できる。

ヨトウ虫類：ハスモンヨトウ

夏季が高温乾燥の年は８月頃より大発生するので注意が必要である。

早くから産卵被害発生に注意し、初期の被害葉を見過ごさないようにする。

大発生を見たら、ハスモンヨトウに登録された農薬がないので野菜に使うことができる農薬を準用する。

追肥

追肥は元肥とは区別した施肥設計にもとづく施用と生育状況を把握した施肥を行う。

追肥：化成肥料の成分割合は窒素分が少ない割合の肥料を用いる。

一例を示すと化成５－５－５－１（ダイアミノ）（チッ素、リン酸、カリ、マグネシュウム（苦土))

追肥①　ダイアミノ　　２．５ｋｇ

　　硫酸苦土　　０．４５ｋｇ

追肥①をよく混ぜ合わせる。なお追肥は花芽が出てから始めます。２週間に１回程度与える。５０リットルの栽培桶で１０ｇを目安とします。